

市原市立市津公民館講座

大人の社会科見学

令和2年9月25日

市原里づくりの会 山越国臣

茂原の歴史散歩

～お隣は、どんなところ～

【はじめに】きょうの「大人の社会科見学」。新型コロナ禍の影響で自粛生活を強いられている中での開催です。今回は市原市の“お隣を知ろう”ということで、茂原市に焦点をあてました。みなさんも一度は訪れたことがあるでしょう。春の「お花見」、「茂原七夕まつり」は有名です。毎年、多くの観光客でにぎわっています。そのほかにも魅力的な観光スポットは多いです。江戸時代中期の著名な儒学者・荻生徂徠（おぎゅう・そらい）。彼が勉学に打ち込み、青年期を過ごした場所。茂原に明治・大正時代に、人が押した「汽車」・人車鉄道があったこと。太平洋戦争時に、海軍の飛行場ができ、零式戦闘機を隠した掩体壕（えんたいごう）などの戦争遺跡が各所に残っていること。茂原が「天然ガス」の恩恵を受け、街を発展させたことーなど。茂原は意外な歴史を持っています。こんな茂原の歴史散歩です。

お話しする内容

（一）茂原市の歴史と風土記

- ①「もばら」の起こり
- ②「お花見」と「七夕まつり」
- ③六斎市
- ④自然災害の多い街
- ⑤「荻生徂徠」勉学の地

（二）後編（10月9日）意外な茂原の歴史

- ①人が汽車を押した頃
- ②茂原に海軍飛行場があった。「太平洋戦争最後の戦い」
- ③天然ガス物語。茂原は天然ガスとともに栄えた

「茂原」の地名由来

「茂原」は「藻の原」が変化して、茂原の地名がついたといわれています。今から約1300年前、当地は湿原で藻の原のようでした。時（奈良時代）の上総国の介・藤原黒麻呂が、

人の手を加え、開拓したのが始まりという。黒麻呂は藤原不比等の長男・武智麻呂（南家）の流れをくむ、名門の出です。介は2番目の役職で、当時の上総国の長官・守は、「万葉集」を編さんしたといわれている大伴家持でした。着任した（宝亀5年・774）黒麻呂は、上総国を巡検し、未開拓の「藻の原」に、目をつけたと思われます。その後、奈良・興福寺に「藻の原荘」として寄進され、荘園として歩みます。武士の時代を迎え、日蓮宗の開祖・日蓮聖人との関係が生まれます。茂原は、日蓮聖人がお題目「南無妙法蓮華經」の7文字を初めての信者に唱えた聖地です。土地の武士・斎藤兼綱の居宅が「妙光寺」となり、江戸時代までは、一般に「藻原の寺」と呼ばれ、「藻原寺」が寺号となりました。「茂原」の地名も、江戸時代の初めごろからという。

お花見と七夕まつり

春になると、茂原は華やぎます。茂原市役所近くの茂原公園。約2650本のサクラの花が開き、園内がピンク色に染まります。「日本さくら名所100選」で知られ、多くの観光客でにぎわいます。赤い橋がかかる弁天湖に映えるサクラ。夜桜も幻想的です。そのほかに、市役所沿いの豊田川の菜の花とサクラの組み合わせも、写真愛好家には絶好のアングルです。「七夕まつり」は、茂原を代表する伝統行事（イベント）。今年は、新型コロナウイルスの影響で、中止となりました。昭和30年（1955）に始まった歴史の中で、初めてのことでした。駅前の榎町商店街の活性化策としてスタート。今では、千葉県を代表する夏の一大イベントになっています。ちなみに、神奈川県「平塚七夕まつり」、埼玉県「入間川七夕まつり」と並んで「関東三大七夕まつり」と呼ばれています。

六斎市

「六斎市」は、毎月6回、露店で野菜や果物、干物、植木などの商品の売り買いの市場が開かれること。茂原では、「4」と「9」の日に市内の昌平町通りで開催されます。定期市は、慶長11年（1606）に徳川家康の家来・大久保治右衛門忠佐（ただすけ）によって開設されたといわれています。茂原は外房と内房つなぐ交通の要衝地。“中継ぎ場”として、定期市の発展とともに街も栄えました。400年以上の伝統を誇る六斎市。昔ほどのにぎわいはないが、今でも近郷の農家の人たちが、自慢の一品を持ち寄り、並べています。

自然災害の多い街

昨年秋の台風15号、21号の襲来で、千葉県をはじめ、日本列島は大風、床上浸水など大きな被害を受けました。市原市では、ゴルフ練習所の鉄骨が倒壊し、付近の住宅を直撃しました。茂原市も例外ではなかった。約950戸の床上浸水、約500戸の床下浸水が確認されています。女性が川に落ちて、流され死亡しました。平成2年（1990）12月には、竜巻によって茂原の街が壊滅状態になりました。史上最大級の竜巻で、平均的な竜巻の50倍以上の規模だったという。死者一人、負傷者73人、家屋の全壊82戸、半壊161戸、一部

破損1504戸の被害がありました。

江戸時代の元禄16年(1703)11月23日の深夜、房総半島をはじめ関東一円に大地震が発生しました。世にいわゆる「元禄地震」です。江戸時代を通じて屈指の大地震で、「関東大地震」(大正12年9月・1923)より地殻変動は大きかった。震源地は、南房総の野島崎沖でした。大津波が発生し、太平洋岸に面した九十九里浜一帯では溺死者が多く出ました。その津波は、内陸の茂原まで押し寄せた。その痕跡を知る「元禄津波供養塔」が、市内鷺巢の鷺山(じゅせん)寺に建っています。台座には、溺死者2154人の名前が刻まれ、九十九里南部の甚大な津波被害の大きさが伝わってきます。「鷺山寺」は「藻原寺」に隣接し、石塔は茂原市の指定文化財になっています。また、茂原市は気候変動も激しく、夏場などは「茂原市で猛暑日を記録した」などのニュースを耳にします。

荻生徂徠と本納。「勉学之地」

荻生徂徠(おぎゅう・そらい)。学生時代に社会科の授業で耳にしたという人が多いと思います。徂徠は、江戸時代中期の儒学の大学者。14歳から27歳まで、上総国長柄郡本納村(茂原市)で過ごしました。寛文6年(1666)に江戸で、医師・方庵の子として生まれました。父は、5代将軍・徳川綱吉に館林藩の時代から仕えていたが、不興を買い、江戸払いになりました。そこで、母親の故郷である南総(本納)に一家で移り住んだ。この地で、青年期を勉学に打ち込みました。後の大学者になる礎を築いたのです。父が赦免となり、再び江戸にもどり、柳沢吉保の儒者として召し抱えられ、将軍・徳川綱吉の学問相手を務めるなど頭角を現しました。また、徂徠の話しぶりには、終生「上総なまり」が残ったと伝わっています。父と徂徠は江戸に上ったが、母は本納で没し、実兄は当地に残り医業を続けたといわれています。本納には、徂徠一家が暮らした旧宅跡と母親の墓所があります。旧宅跡は「荻生徂徠勉学之地」の石碑が建ち、千葉県指定文化財になっています。

後編(10月9日)。茂原市の意外な歴史

人が押した鉄道

明治・大正時代に、千葉県内で人(人夫)が客車を押して、鉄道が運行されていたことを知っていましたか。多くの人たちは「こんな鉄道があったの」と、人車軌道の存在を知りません。千葉県において、最初に登場した鉄道は総武鉄道、房総鉄道、成田鉄道、日本鉄道の私鉄4路線でした。大正9年までには国有化され、千葉県内の幹線鉄道網が整い、現在に至っています。「人車鉄道」は、こうした動脈のような幹線鉄道に通じる「静脈」、末端部のローカル交通を担う手段として誕生しました。明治33年(1900)の野田人車鉄道の開業が最初です。野田の醤油を運ぶために、醤油醸造家らが運行組合を作り、製品を工場間や江戸川河岸まで走らせた。房総地方では、庁南(長南)―茂原間人車軌道が明治42年(1909)10月に茂原駅前―台向(長南町)間9.2㎞が開通した。停車駅は5か所。運賃は1駅3銭(現

在価値で、1銭100円ぐらい)、全線で15銭だった。当時は馬車運行が25銭ということで、格安と利用された。人を運ぶが貨物も運んだ。むしろ、貨物が主流で長南特産の「吠(かます)」を運んだ。軍物品を梱包するために、当時は吠の需要が多く、ひんぱんに茂原駅に運びこまれた。人車軌道は、千葉県が建設し補修にあたった。運営は吠業者らが、組合を作り運行したという。千葉県内は、国の陸軍の鉄道連帯が駐屯していたために、建設は陸軍があたった例が多い。そのために、鉄道網が比較的早く整備されたという。最初は、業績は好調だった。しかし、次第にバス、トラックの登場で経営が悪化。大正13年(1924)ごろに旅客輸送を停止しました。大正14年には貨物輸送もやめて運行組合は解散しました。人が汽車を押した時代が去ったのです。そのほかに、大正元年(1912)12月に、夷隅郡役所が置かれた大多喜町と物資の集散地であった太平洋岸の大原町を結ぶ「千葉県営大原大多喜人車軌道」が開通しました。その後民間に払い下げられて、国鉄木原線、現在の「いすみ鉄道」という変遷があります。大正時代の中ごろは、「おらがムラにも鉄道を敷設」という機運が高まりを見せた時代でした。こうした中で、茂原駅と小湊鉄道・鶴舞駅を結ぶ「南総鉄道」の鉄道建設が計画されました。実際に茂原駅—笠森観音(笠森)間(11.2㍎)で開通。笠森駅には、遊園地もできたといえます。名所は懸崖づくりで知られた笠森観音ぐらいしかなく、当初から旅客収益は望めませんでした。結果、上総鶴舞駅までの延伸は果たせず、世界恐慌のなかで「南総鉄道」の8年半の歴史に幕を下ろしました。

「太平洋戦争—最後の戦闘」。茂原海軍航空基地

昭和20年(1945)8月15日。「終戦の日」の早朝、茂原市にあった茂原海軍航空基地から1機の零式艦上戦闘機(ゼロ戦)が飛び立った。飛来した米軍機を迎え撃つために、激しい空中戦が行われました。当時は、米軍に制空権を奪われ、わが物顔で敵機が日本の上空に飛来を続けていました。その結果、ゼロ戦機は撃墜され、房総の地(大多喜町の周辺?)に墜落、炎上しました。搭乗員は二十歳の茂原海軍航空基地・第252海軍航空隊に所属する上飛曹でした。皮肉にも戦死した数時間後、天皇陛下の「玉音放送」が流され、日本は終戦(敗戦)内外に宣しました。終戦の年の2月。こんな事実があります。睦沢町の上空で、日本機と米軍機の空中戦があり、日本機が墜落炎上した。パイロットは、茨城県の下館飛行場から飛び立った中尉(当時26歳)でした。その月(2月)に、婚礼の式を挙げたばかりだった。茂原海軍航空基地を守るための任務遂行中の戦死でした。そのほかに、茂原海軍飛行基地からは終戦間際に九州の基地に多くの隊員が転属となりました。隊員たちは、片道切符の特攻機に乗り、壮絶な戦死を遂げたという。現在、睦沢町立歴史民俗資料館で「ミニ企画展・太平洋戦争最後の戦闘—昭和20年8月15日の房総半島—」が開催されています。(同展は9月27日まで)

「茂原海軍飛行基地(飛行場)」は、本土・首都防衛を目的に、日中戦争が本格化し、日米関係が悪化する昭和16年9月に建設工事が始まりました。東郷村(現在茂原市)の航空基地の予定地を、海軍が強制的に収容し、住民を移転させたという。神社から寺院、役場、

国民学校と多くの施設が動きまわりました。建設工事には、正規の軍の工兵、徴用工らがあたりました。それでも間に合わずに付近の住民や学生が勤労働員されたという。敷地面積195万平方メートルの中に、長さ1200メートル、幅80メートルの滑走路と誘導路。航空隊本部庁舎や兵舎などが整備された。敗戦が濃厚となる終戦間際には、ゼロ戦などを隠す掩体壕と呼ばれる格納庫が、17基建設されました。これらの建設工事にも、学生らの勤労働奉仕がありました。現在、茂原市内には掩体壕が10基、1000メートル道路と呼ばれている滑走路跡などの戦争遺跡が残されています。しかし、こうした経緯もあり、住民（東郷地区の市民ら）は戦争遺跡に対しては良い感情を持っていないようです。残された掩体壕は個人所有。コンクリートの劣化が進み、管理が大きな問題になっています。現在、一部は茂原市が借り上げ、一般に公開しています。今年が終戦から75年の節目の年。茂原海軍飛行基地が存在した。東金、香取、松戸、館山、木更津などにも航空基地が千葉県にあったことを知る機会かもしれません。

天然ガスの物語。「大多喜ガス」の秘密に迫る

千葉県は、新潟県に次いで全国2位の生産量を誇る「天然ガス県」だということを知っていましたか。市原市の場合、都市ガスといえば「大多喜ガス」が一般的です。では、なぜ大多喜ガスとよぶのでしょうか。天然ガスの秘密に迫ります。天然ガスは、地球の長い歴史が作り上げた地下資源といえます。天然ガスは単独に存在する構造性天然ガス。地下かん水（塩水）とともに存在する水溶性天然ガスの2種類に分けられます。水溶性では、千葉県が生産量トップです。主産地に長生地域。茂原市を中心に「南関東ガス田」が形成され、採掘が続けられています。天然ガスを産出する地層は「上総層群」と呼ばれ、新第三紀鮮新世～第四紀更新世（約300万年～40万年前）の海底に堆積した地層。いわゆるメタンガスと呼ばれ、埋蔵量は約400億立方メートルで、現在の生産量で約800年分に相当するという。天然ガスは、市原市でも採掘されています。ガスタンクなどもあり、工場群がある茂原市とパイプラインでつながっています。

天然ガスの本格的な利用は明治末期から始まりましたが、ガス井戸の発見は明治24年（1891）でした。大多喜町の醤油醸造家の山崎屋太田卯八郎が、自宅内で井戸を掘っていたところ、茶色の醤油のような泡を含んだ水が湧き出した。がっかりした卯八郎が、タバコの火を井戸に投げ入れたところ。何と、水が青白い炎を発生し、燃え出しました。これが水溶性天然ガスの発見となりました。日本では、江戸時代の初めに新潟県で天然ガスが見つかったということです。城下町の面影が残る大多喜町上原には、「天然瓦斯井戸発祥之地」の石碑と説明文が建っています。水溶性の天然ガス（メタンガス）からは、副産物としてヨウ素が産出されます。日本はチリに次いで、世界2位のヨウ素産出国。ヨウ素（ヨード）は、新型コロナウイルスの予防策として「ポピドン・ヨード」が注目されました。いわゆる「うがい薬」ですが、原料となるヨードは天然ガスと一緒に採れるのです。この新型コロナ禍にあって、ヨードの需要は伸びていることでしょう。

「天然ガス」を利用した自己完結型の街づくりを目指している自治体があります。茂原市

に隣接する睦沢町です。睦沢町は、茂原市と同じく豊富なガス埋蔵量を誇り、町営でガス公社を運営しています。その熱量で電気を起こして供給しています。採れた天然ガスで自家発電し、主な施設に供給しています。新しくできた「道の駅・むつざわ一つどいの湯」には、入浴温泉施設が併設されています。昨年の房総豪雨による千葉県中の大停電。睦沢町は無縁でした。お風呂難民の町民に、温泉施設を開放して喜ばれました。最後になぜ大多喜ガス？の謎。第一号井戸が大多喜町だったからです。豊富な埋蔵量を誇る天然ガスですが、今後の課題、問題点もあります。採掘による地盤の沈下の問題です。深刻な社会問題化となっていますが、生産と抑制のバランスをどのように取っていくのかがカギとなりそうです。

【おわりに】

市原市の近くにも、すてきな場所があります。これであなたも“茂原通”になりました。人が汽車を押した人車鉄道。本土・首都防衛のために千葉県のあちらこちらに建設された軍の飛行場。天然ガスが生まれた経緯など。みなさんも、意外な歴史をもつ茂原へ、Go To Travelしてみませんか。

※参考資料 ふるさと茂原のあゆみ（茂原市）、千葉県の歴史散歩（千葉県高等学校教育研究歴史部会編）、千葉のトリセツ・地図で読み解く初耳秘話（昭文社）、人が汽車を押した頃・千葉県における人車鉄道の話（佐藤信之著、嵩書房）、千葉の鉄道一世紀（白土貞夫・嵩書房）、千葉県の戦争遺跡をあるく・戦争ガイド&マップ（千葉県歴史教育者協議会編）、もばら風土記・掩体壕が語るもばらの歴史」（茂原市教育委員会）、地図で楽しむすごい千葉（都道府県研究会編、洋泉社）

協力 茂原市立美術館・博物館、睦沢町立歴史民俗資料館